シンポジウム「グローバル化する世界の諸問題」基調講演　宇都宮大学多文化公共圏センター　2008.8.11

メトロマニラのストリート・ホームレス

青木　秀男

こんにちは、青木と申します。私は、「都市下層の社会学」を専攻し、日雇労働者やホームレスについて勉強している者です。また国際比較という観点から、フィリピン・マニラの最下層の人たちについて勉強しています。それで今日は、マニラ（首都圏）の「ストリート･ホームレス」の生活実態について、見聞きした事柄をお話したいと思います。

今、マニラでホームレスが急増しています。その前に一言触れますが、途上国都市には、マニラもそうなのですが、スクオッター、日本では「不法占拠居住区」と呼ばれていますが、このスクオッターに多くの人が住んでいます。マニラでいうと、人口が一二〇〇万人として、研究者によって数字が異なるのですが、およそ三五パーセントから四〇パーセントが、スクオッターの住民だといわれています。そもそもスクオッターとは、一般のスラムとは異なって、河川敷や鉄道線路敷、ゴミ捨て場、公園、空き地などの公有地や私有地に勝手に入り込んで、そこにバラックを建てて住んでいる人たちのことをいいます。彼・彼女らには、そこに住む法的な居住権がないのです。ですから「不法占拠地区」と呼ばれたりするわけです。したがって、この人たちは広い意味でのホームレスです。それらの土地に何十年も住み着いている人もいます。しかし何年住んでいようと、彼・彼女らは、いつそこを追い出されるか分かりません。つねに強制撤去に怯えているのです。このような人たちがマニラに四〇〇万人以上もいます。この事実一つをとっても、途上国都市の貧困のスケールの大きさが分かるというものです。

このように、マニラにはスクオッター・ホームレスがたくさんいるのですが、今日の話は、この人たちのことではありません。そうではなくて、彼・彼女らのさらに下の階層の人たち、つまり、スクオッターにさえ住むことができずに、毎日ねぐらを探して、文字通り路上で寝泊りしている人たちが、近年急増しているという話なのです。私は、この人たちのことをストリート･ホームレスと呼んでいます。スクオッターについての研究は、フィリピンにもたくさんあります。ところが、ストリート・ホームレスについての研究はほとんどありません。ある学者は、ストリート・ホームレスのことを、「目に見えるホームレス（visible homeless）」とか「もう普通の生活に戻れないホームレス（permanent homeless）」と呼んで、スクオッター･ホームレスと区別しています。フィリピンの人たちは、そうした人たちが増えていることに気づいています。行政の事務所に行っても、NGO の事務所に行っても、マスメディアの人に会っても、「路上で寝起きしている人が増えていますね」というと、みんな「そういわれるとそうですね」と答えます。そういう認識はみんなもってい

ます。ところが、「彼・彼女らの数や生活の実態はどんなものですか」と聞くと、だれも知らないのです。実態を掌握していないのです。スクオッターの問題で手が一杯で、ホームレスの問題にまで及ばないというのです。私は、そういう人たちの実態をなんとか調べることはできないだろうかと考えました。それで、私が最初に行なったのは路上観察です。そこからしか始めるしかなかったのです。マニラに、路上で生活する人たちが多い場所、ターミナルや繁華街、公園、教会、墓地などがいくつかあります。私は、そこで観察をしました。そういう初歩的な方法で調査を始めたわけです。すると、いろんな人が路上で生活し、活動している姿が見えてきました。まずもっとも多いのは、路上で仕事をしている人たちです。この人たちの中心はヴェンダーと呼ばれる物売りです。物売りがマニラの路上に溢れています。

次に路上で観察できたのは、地方から出てきた出稼ぎ労働者です。ただしこの人たちは、物売りと一部重なる人たちです。出稼ぎ労働者がとくに多かったのは、マニラのリサール公園という大きな公園でした。この人たちは、ほとんど男性なのですが、公園で寝起きしながら仕事を探して、仕事があると公園を出て、仕事が終わったら公園に帰ってくるという人たちです。私が話した人は、大工さんと左官さんでした。そして人によって違いはありますが、一ヶ月に一回なり、二ヶ月に一回なり、貯まったお金をもって故郷に帰るという人たちです。彼らは、仕事がないときは、親方から商品を借りて物売りをしたりします。

もう一つの路上生活者は、スクオッターを追い出された人たちです。じつは、ストリート・ホームレスのもっとも大きな供給源が、この人たちなのです。今、マニラでは、スクオッターの強制撤去がどんどん進んでいます。スクオッターを撤去するたびに、警官隊が出動して、それに対して、行き場のない住民が石を投げたりして抵抗します。警官隊が発砲します。その度に流血の事態となります。そんな光景が、マニラで、毎日のようにどこかで起こっています。その結果、スクオッターを追い出されて、行く所がなくなった人たちが出てきます。スクオッターを追い出されても、多くの人たちは、親戚などを頼って別のスクオッターに移っていきます。しかしそうしたセーフティ・ネットがない人たちは、スクオッターを追い出されても行く所がありません。彼・彼女らは、元スクオッターの鉄条網が張られた傍の路上に留まって、そこで寝起きして、物売りなどをして日銭を稼いで暮らします。たとえば、マニラにキアポというターミナルがあります。そこにはイスラム教徒のモスクがあって、その周りにスクオッターに住みながら物売りをしている人がたくさんいました。ところが、このスクオッターが強制撤去されました。私は去年の三月と十一月に行ったのですが、三月にあったスクオッターが、十一月にはありませんでした。周囲が鉄条網で囲われて、銃をもったガードマンが、元住民が侵入しないように見張っています。そこで暮らしていた人たちはどうかといいますと、鉄条網の周辺で物売りをしながら寝起きしているのです。つまり、スクオッター・ホームレスがストリート・ホームレスになったのです。このような光景が、マニラのあちこちで繰り広げられています。

路上で生活する人の最後は、ストリート・チルドレンです。ストリート・チルドレンの

研究は、多くはないですが、あります。ただそれらの研究は、子どもの人権や福祉という観点からのものがほとんどです。私のように「ストリート・ホームレス」という、実態解明の観点からストリート･チルドレンを取り上げた研究は、ほとんどありません。ストリート・チルドレンが何人いるかについては、研究者によって一致しません。通説では、マニラで、七万五〇〇〇人の子どもたちが、路上で生活しているとされています。その内のおよそ七割の子どもが親といっしょに暮らしています。親もたいていは路上で暮らしています。しかし、スクオッターに家をもつ親もいますので、すべての親がホームレスとは限りません。スクオッターに住んで、子どもが路上で暮らすというケースも、少なくありません。たとえば、親の暴力から逃げ出した子どもの場合です。

路上で生活し活動している人たちを分類すると、このような人たちがいることになります。もちろん、それらのグループは重なりあっています。また、夜になるとスクオッターの家に帰る人や、出稼ぎ者で田舎に家をもつ人のように、路上で仕事をしている人たちには、ホームレスとは呼べない人たちもいます。

では、ストリート・ホームレスとは、具体的にどんな人たちなのでしょうか。これが気になるところです。先ほどいいましたように、ストリート・ホームレスについてのデータは、ほとんどありません。それでここでは、一つの方法でストリート・ホームレスの全体像を推測してみようと思います。マニラに、ストリート･ホームレスを収容する施設がいくつかあります。どれも小さな施設です。私は、その内の一つを訪ねました。そこで聞いた話から、おおよそのホームレス像を描くことができます。

まず、施設に入ったストリート・ホームレスのおよそ七割がシングル、つまり単身者だということです。乱暴な推測になりますが、これがかりにマニラのストリート・ホームレスの全体を反映する数字だとすると、次のような計算になります。まず、マニラに七万五〇〇〇人のストリート･チルドレンがいます。その内の七割には親がいます。その親の大半もストリート・ホームレスだとします。これに、シングルのホームレスが加わります。さらに、ストリート・チルドレン自身の数が加わります。すると、子どもも大人も入れたストリート・ホームレスの数は、少なく見積もっても、マニラに一〇万人をはるかに超えることになります。ストリート・ホームレスの数を算定した人はだれもいません。そうした事情のなかで、こうした乱暴な推計をしてみると、ということです。

しかも、ストリート・ホームレスの数を推計する場合、だれをホームレスとして数えるのかという技術的な問題が伴います。先ほどいいましたように、スクオッターの人たちも広い意味でホームレスです。ならば、スクオッター・ホームレスとストリート・ホームレスをどこで区別するのかという問題が出てきます。これが簡単な問題ではないのです。たとえばシェルター（バラック）の定義の問題があります。スクオッターの人たちは、半永久的なシェルターをもっています。これに対して、ストリートの人たちには、たとえば建物の壁からビニールを架けて、その小さな空間で一定期間を過ごす人がいます。では、この空間もまたシェルターではないのかという問題です。もう一つ、行政の人は、「ストリー

ト･ホームレスの人たちは、寝場所を毎日変えて移動するから、何人いるかは数えられない」といいます。しかし私はそうは思いません。日本のホームレスの場合もそうなのですが、ホームレスが寝場所を移動するといっても、路上で確実に生活資源が得られて、夜は安全に寝られる場所を探すのは、容易なことではないのです。ですから、ホームレスの人たちは、ある限られた範囲の空間を行ったり来たりしているだけです。私が観察したかぎり、マニラのホームレスもそうです。何人かのホームレスと知り合いになって、彼・彼女らのあとについていったことがあります。そのときも、彼・彼女らの行動範囲はおおむねそんなものでした。ですから、ストリート・ホームレスの数は、一定範囲の空間を単位として、少なくとも概略は掌握できるはずです。日本のホームレス調査でも、同じ方法で数を割り出しています。

スクオッター・ホームレスとストリート・ホームレスの区別について、もう一つ厄介な問題があります。一般にストリート・ホームレスは、個人や家族単位で路上を移動しています。しかし、公園や墓地などでは多くのホームレスが集って生活しています。これに対して、スクオッターでは、土地を占拠した人たちが集住しています。しかし次のような例もあります。私が訪ねた河川敷にあるスクオッターでは、少し前に強制撤去があって、多くの住民が他所へ移っていました。私が訪ねたときは、そこを離れるのがどうしても嫌だという家族の家が二つあるだけでした。しかし、それでもそこはスクオッターなのです。二つの家には世帯道具も揃っていて、子どもたちはそこから学校に通っていました。勝手に電線やパイプを引いて、電気も水道もありました。こうした例が示しているように、単独で移動するか、集住するかという基準も、ストリート・ホームレスとスクオッター・ホームレスを区別する完全な基準にならないのです。

次に、ストリート･ホームレスの人たちがどこで生活しているかという問題です。彼・彼女らは、基本的には、ヒトとモノが激しく移動・流通する場所で生活しています。そうした場所では、生活資源が確実に得やすいからです。これは、日本のホームレスでも同じです。ところで、マニラではスクオッターがどんどん撤去されています。その結果、スクオッターのドーナツ化現象が起こっています。つまり、都心部の地価が高い所のスクオッターが撤去されて、スクオッターが、地価が安い周辺部へ拡散しています。すると、貧しい人たちは周辺部のスクオッターに住んで、仕事は、都心部へ三〇分とか一時間かけて稼ぎに出ることになります。しかし、ストリート・ホームレスの人たちにはそんな余裕はありません。ですから、スクオッター・ホームレスは地理的に拡散する傾向にありますが、ストリート・ホームレスは、ダウンタウンなど、生活資源が容易に得られる場所の路上を離れることができません。また、ストリート・ホームレスの空間は、ストリート･チルドレンの居住分布とおおむね重なります。ストリート･チルドレンの親も、たいてい子どもたちの近くにいるからです。

スクオッターについて、もう一つお話したいことがあります。先ほど、スクオッターを追い出された人たちこそ、ストリート・ホームレスの最大の供給源だといいました。マニ

ラ市内を縦貫する国有鉄道があって、この数年間に、鉄道線路敷にあった多くのスクオッターが撤去されました。そして、何十万人というスクオッター住民が居住地を追われました。その人たちは、再居住の土地を要求して行政と交渉しました。ところが、再居住といっても簡単なことではないのです。行政は、マニラからバスで二時間も三時間も離れた山の中に土地を宛がって、「この土地をあげるからここに住みなさい」といいます。というのは、それらの土地が安いので、行政が確保できるからです。ところが、そこには仕事がありません。仕事がなければ生活できません。それで、多くの人がマニラに出稼ぎに出ることになります。そしてそのうち、マニラに住み着きます。最後に、再居住地の土地を売って、マニラに家族を呼び寄せます。こうして、多くの人たちがマニラに戻ってしまいます。たとえば、三年前の話ですが、ある地区で、マニラ郊外に土地を補償する、そこには仕事があるという行政の触れ込みがありました。私が会った人もそこに移るつもりでした。それで、「今度来たときはどうやってあなたに連絡をとればいいですか」と聞きました。すると、「マニラに親戚がいるから、そこに連絡してください」といいました。しかし、それから前回マニラに行ったとき、もう三年前のことだし「行政も固く約束した」といっていたので、その人と直接に連絡を取ることは無理だろうと思いました。しかし念のためにと思い、聞いていた携帯電話に電話をしました。すると相手が電話に出たのです。それで、「あなた今どこにいるの」と聞くと、「前と同じ所にいるよ」というのです。「再居住の話はどうなったの」と聞くと、「揉めていてまだ決着がついてない」というのです。行政による再居住の実態とは、こんなものかもしれません。条件が折り合わないので、遅々として話が進まないわけです。もちろん、失敗例ばかりではなく、成功した例もあります。ただ、こうしたケースが多いという話です。最近は、再居住の土地さえ補償されないまま、スクオッターを追い出されるケースが増えています。それは、山の中の土地でさえ、行政に再居住の土地を確保する資金がないからです。

次に、路上で暮らす人たちは、どのように生活を凌いでいるかという問題です。家族連れで暮らしている人たちは、先ほどいいましたように、ストリート・ホームレスの七割にのぼります。私が友だちになった家族のケースでいうと、子どもが五人いて、一番上が一一歳で、一番下が生まれたばかりでした。子ども五人を抱えて、父親と母親が荷車を引いて、再生資源を集めるスキャヴェンジャー（scavenger）をしています。スキャヴェンジャーには縄張りがあって、それぞれが一定空間のゴミ箱やゴミ捨て場を回っています。私はその家族の持ち場の近くに七ヶ月ほど住んでいたのですが、毎朝、家族の寝場所に行くと、子どもたちが駆け寄ってきて、私の腕にぶら下がりします。朝食にパンを買ってあげるのが日課になりました。あるとき父親が、「マニラでは生活が苦しいし、小さな子どもにこういう生活をさせるのは忍びない。学校にも行かせたいので、故郷に帰りたい」といいました。「故郷はどこですか」と聞くと、ルソン島の北端だといいます。そして持ち金を見せながら、「お金はこれだけあるんだけど、家族で帰るにはとても足りません」といいます。それで私はカンパをしました。日本の三〇〇〇円くらいのお金です。父親は「ありがとう、

助かります」といって、しばらくして帰っていきました。ところが、それから二ヶ月くらいして、道を歩いていて、その一家にばったり出会ったのです。「あなた、どうしたの。田舎に帰ったのではなかったの」というと、父親は「ごめんなさい、ごめんなさい」といいます。「田舎に帰ったのは帰ったんですが、田舎には食べるものがないのです。親戚はいるけど、だれも助けてくれません。親戚にも食べるものがないのです。そのままでは子どもたちが餓え死にしてしまいます。そんな具合で、マニラに戻るしかなかったのです」というのです。この話から、マニラで子どもを抱えながら路上生活をすることがいかに大変なことか、それにも増して、田舎の生活はいかに大変なことかということが、分ると思います。多くの人が、貧しい田舎からマニラへ出てくるはずです。マニラに、栄養失調が原因で死ぬ子どもはたくさんいます。しかし少なくとも、農村のような餓死はありません。

ストリート・ホームレスが生活を凌ぐ仕事は、大きく分けて四つあります。一つは、物売りです。これは、親方から商品を借りて、売り上げの二割か三割を手にするというものです。商品をホームレスに貸す親方がいるわけです。二つ目は、路上の雑多な手間賃稼ぎの仕事です。たとえば、駐車場に車を誘導して、車を見張るカー・ウォッチャー（car watcher）や車の窓ガラス拭き、ジープニー（jeepney 小型乗り合い自動車）へ客を呼び込むバーカー（barker）、道路清掃人、荷運び人、靴磨き、チラシ配り人などがそれです。ホームレスは、雇われて、または自前の仕事を作って手間賃を稼いでいます。三つ目は、再生資源や食料をゴミ箱などで探すスキャヴェンジャーです。グローバリゼーションの影響で、マニラにはコンビニエンス・ストアやファミリー・レストランが急増しています。日本のホームレスでは、幸運な人たちは、コンビニの期限切れの食品を貰って生活を凌いでいます。しかし、マニラの場合はそうはいきません。お店が期限切れの食品を捨てるなどということがないからです。フィリピンには、日本のような飽食の余裕はありません。ですから、期限切れの食品の恩恵に与るホームレスはいません。それで結局、ホームレスは、ゴミ箱やゴミ捨て場を回ることになるわけです。ストリート・ホームレスの四つ目の仕事は、物乞いです。物乞いにもいろんな人がいます。子どもの物乞いもいます。障がいをもった物乞いもいます。「痩せた子どもを抱いた物乞い」もいます。日本でも、昔、「乞食」と呼ばれた時代には、物乞いに子どもを貸す商売があったそうです。それと同じことが、今マニラで行なわれているのです。物乞いが商売をする場所取りもなかなか厳しいようです。物乞いのシンジケートもあります。

ここまで、私が調べたかぎりのホームレス像について、ほんの一部をお話しました。最後に、なぜ「グローバリゼーションとホームレス」なのかという問題について一言話しておきたいと思います。この話の要点を一言でいいますと、グローバリゼーションが、社会の階級格差を押し広げ、その最下層にストリート・ホームレスという階層を生み出した、同時に、グローバリゼーションは、サービス経済を膨張させ、その結果、路上でもさまざまな生活資源が増えた、それが、ストリート・ホームレスが増える原因になった、ということです。先ほどコンビニが期限切れの食品を放出しないといいましたが、そうはいって

も、マニラでもコンビニやファミリー・レストランが急増しています。たとえばセブンイレブンは、マニラに、一九八四年に一号店ができました。それが現在では三〇〇店にもなっています。フィリピンにはセブンイレブンの他にも、ジョリビーという巨大なコンビニ兼ファミリー・レストランがあります。ジョリビーの店舗数は、在フィリピンのマクドナルドよりも多いそうです。マクドナルドの店舗もじつに多いのですが。マニラでは、「石を投げればジョリビーに当たる」くらいにジョリビーが多いといいます。さらに、外資系・フィリピン系の外食産業も増えています。このような状態にあって、これらの店が期限切れの食品は放出しなくとも、再生可能な生活資源を大量に放出しています。また、マニラでも中流階級の人口が増えています。裕福な外国人も多く住んでいます。それらの人たちが増えるにつれて、ホームレスが与れる仕事も増えていきます。駐車場の誘導や見張りや荷運び、ビルの掃除、お手伝いさん、子守などなど、雑多な仕事が次つぎと現われています。つまり、グローバリゼーションこそが、産業構造を変容させ、ストリート・ホームレス自体を生み出している、同時に、ホームレスを路上で支える生活資源も増やしているということです。ただし、グローバリゼーションがホームレスを支える生活資源を増やしているからといって、ホームレス自体を生み出しているグローバリゼーションを免罪することにはなりません。グローバリゼーションは、家もなく、仕事もなく、たえず追い立てられて、迫害されて、孤独や暴力や病気や死といった、苛酷な境遇にあるストリート・ホームレスを生み出した張本人なのです。

グローバリゼーションとストリート・ホームレスの関係についてもう一つ、フィリピンの労働事情があります。今、フィリピンの労働市場が大きく変容しています。これは日本も同じことなのですが、企業の雇用が、正規雇用から非正規雇用へどんどん切り替えられています。そして、非正規雇用の人たちがどんどん解雇されています。日本でも「派遣切り」が問題になりました。フィリピンもそれと同じです。この問題に関わって、私は、マニラ郊外の二つの工場でアンケートの調査を行ないました。どちらも外資系の会社です。それらの工場でも、非正規の契約労働者がどんどん増えていました。そもそも、外資系企業の正規雇用者であっても、フィリピン政府が定める最低賃金さえ貰えない工場労働者が少なくないというのが現状です。契約労働者の場合は、三ヶ月ごとに雇用契約を更新しなければなりません。フィリピンの労働法には、「三回目の更新時には、雇用者は正規雇用に切り替えなくてはならない」とあるのですが、ほとんど実行されていません。契約労働者は、三ヶ月どころか、三年経っても四年経っても、契約雇用者のまま使われています。契約雇用者の賃金は、もちろん最低賃金以下です。それでも、スクオッターの若者にとっては、そうした仕事に就ければまだいい方なのです。また途上国都市には、インフォーマル・セクターと呼ばれる雑多な仕事があります。路上の仕事はほとんどこれに当たります。それは、近代的な資本に雇用されるのではなく、自前で、税金も払えないで、私的な、または前近代的な雇用契約のもと、劣悪で苛酷な条件で就労するような仕事のことをいいます。今、この職業階層の人たちが増えています。たとえばコンビニやレストランの従業員、ビ

ルの管理人やドライバー、お手伝いさんのような、企業にサービスを提供したり、中流階級の人びとにサービスを提供する仕事がそれです。そして最近では、れっきとした企業の正規雇用者が、賃金が安くて生活できないので、仕事を辞めるとか、兼業をもつとかして、インフォーマル･セクターに入ってきています。そのため、インフォーマルな仕事で生活を支えていた下層の人たちは、上からトコロテンみたいに下に押し出されていきます。彼・彼女らは、インフォーマルな職種にさえ容易に就けなくなっています。そしてその一部が、決まった仕事のないホームレスになっていきます。このような状況も、ストリート・ホームレスが増えている背景になっているのです。

以上、ストリート・ホームレスについて、その実態のほんの一端を話させていただきました。途中で残念なのですが、まずは話を終らせていただきます。わたしの調査はまだまだ続きます。そして、フィリピンの貧困の本質に迫りたいと思っています。